

## 終戦直後、西川町間沢に滞在した橋田壽賀子のこと

新 宮 学

はじめに

「おしん」映画版の上映がまもなく始まる。おしんは、山形の雪深い山村に生まれ、明治・大正・昭和をたくましく生きた一人の女性を描いた連続ドラマの主人公である。テレビドラマの放映に先立ち、一九八三（昭和五十八）年一月下旬にNHKのロケ隊一行五〇名が厳寒の西川町の大井沢地区に入った。区民挙げての協力のもとで、寒河江川上流一三か所で雪を背景にして、主に少女時代の撮影が行われた。四月から翌年三月まで一年間放送されると、平均視聴率五二・六%とテレビドラマ史上空前の視聴率を記録した。中曽根「行政改革」が始まったばかりの日本社会では、一大「おしんブーム」が巻き起こった。そのため、同町の月山朝日地区観光協会では「おしんのふるさと大井沢ロケ地めぐり」というチラシを作成し、観光客の誘致を図つ

たほどであった。<sup>1)</sup>

ドラマ「おしん」は、一九八三年度（第十六回）テレビ大賞を受賞した。また橋田は一九八四年度（第三十二回）の菊池寛賞に輝き、その業績が高く評価された。

放送から三〇年あまりが経過した。この間、「おしん」の人気は国内のみならず海外にまで広がり、七〇に近い国々で放送されている。発展途上国で次々と放送され、とりわけ経済発展の著しいアジア諸国で、現在も根強い人気がある。漢語圏では、おしんは「阿信」と表記される。中国では、早くも一九八五年に放送されて大好評となり、日中戦争を体験した世代にも受け入れられた。<sup>2)</sup>台湾では九四年と遅れたが、以来繰り返し再放送されて、その回数は二十七回にも及んでいる。

今回の映画リメイク版では、とくにおしんの少女時代に焦点が当てられる。鶴岡市出身の富樫森映画監督がメガホ

ンをとり、庄内映画村や山寺など県内各地でロケが行われたことが新聞等で報道されているが、西川町内でのロケは行われなかったようだ。映画上映により以前のようなブームの再来が期待される一方で、筆者は「おしん」が西川町との深い関わりをもって生まれていった事実が忘れ去られてしまうのではと、些か心配になっている。

「おしん」と西川町の関わりというのは、先に触れたように西川町大井沢地区でドラマ「おしん」の少女時代のロケが行われたことが一般には知られている。ロケ地に選ばれたのは、大井沢が山形県内有数の豪雪地帯として知られていたからである。大井沢は、山形県の中央に位置する月の麓にあり、最上川の一支流、寒河江川の上流に沿って開けた集落である。おしんは「山形の最上川上流の寒村で生まれた」とドラマでは設定されているから、その選択はとも相応しいものであった。しかし、もう一つ忘れてはならない関わりがあった。それは、「おしん」の原作者橋田壽賀子が終戦まもない時期、山形の西川町に滞在していたことである。その体験が、のちに「おしん」の誕生に大きな影響を及ぼすことになったと考えられるからである。

ここでは、まず橋田の著作をもとに、終戦直後の一時期山形に滞在した橋田に対し山形の自然が教えてくれた生き希望について一瞥する。ついで、その滞在先が旧西山村

間沢まざわ（現、西川町）であったことを改めて確認するとともに、おしんの少女時代のロケ地の一つに選ばれた大井沢との深い縁ゆかりについても触れることにしたい。

### 一 山形の黄金色の稲穂と紺碧の秋空

橋田壽賀子は、一九二五年、日本統治下の朝鮮半島の京城（現、ソウル）で生まれた。父親が朝鮮で事業を起こしていたからである。五歳の頃に東京の伯母の家に一時預けられたものの、ほどなく京城に戻り現地の小学校に上がった。その後、大阪の小学校に編入しついで女学校を卒業すると、四三年春、親元を離れて東京の日本女子大学国文科に入学した。二年次在学中には軍需工場に学徒動員となった。東京大空襲後は実家がある大阪の堺にもどつたが、豊中の海軍の経理部に徴用されているあいだに、終戦を迎えた。<sup>5)</sup>

橋田はその著書『おしんの遺言』で、終戦直後山形に來ることになった経緯について、次のように記している。

終戦から二か月ほどたった一〇月半ばに女子大が再開され、私は東京に戻って復学しました。ところが、寮生活では、食糧の配給が来る日も来る日もウドばかり。なぜ、あれが配給になったのかわかりませんが、もう一〇

日もすると、飢え死にしそうになりました。それで、叔母が疎開していた山形に行こうと思つたのです。二日間くらい並んで、ようやくのことで切符を手に入れ、メリケン粉を載せたすし詰め<sup>①</sup>の貨車に乗り込みました。そして、最上川の上流の左沢というところに着いたのです。ここでは、左沢に着いたということになつてゐるが、それが橋田の記憶違いであつたことについては後述する。

山形滞在中の心境についても、橋田は同書の中で触れている。本書の中でもっとも印象深い、珠玉の文章が綴られているので、そのまま引用して紹介することにした。

ちようど山形は、稲の実る季節でした。もう、見渡す限りに、稲の穂が黄金色の波のように続き、神々しいばかりに光つていました。国破れて山河在り——、焼け野原になつた大阪や東京の街を見て、絶望してきた私には、このとき初めて、「ああ、日本は大丈夫だ」とそう思へたのでした。こんなにお米があるなら大丈夫だ、と。その黄金の稲穂の波を見て、これからもういつペン生きたるんだな、人生のやり直しができるんだなど、新しい未来を生きていけるのだという希望を、山形の自然が私に教えてくれたのです。そして、一所懸命に生きようと、私は山形の紺碧<sup>②</sup>の空に誓つたのです。

山形の見渡す限り黄金色に波打つ稲穂と紺碧の秋空は、そ

れから二十年あまりの後「おしん」の生みの親となる橋田に、絶望から立ち直り新しい未来を生きていく希望をあたえたのである。

## 二 西川町間沢にあつた材木店

山形の滞在先について、橋田は著書『こころ模様』<sup>③</sup>の中では、より詳しく「左沢から少し奥に入った村」と記している。

その「最上川舟唄」の発祥の地、左沢は、私にとつて忘れられないところで、終戦後すぐ、食料がなくて飢え死にしそうになつたとき、左沢から少し奥に入った村へ疎開していた伯母を頼つて、食べさせてもらいに行つたことがあつた。そのとき、初めて山形の方言をきいたのである。なにを言っているのかさっぱりわからなかつたが、村のかたたちのあたたかい心だけは、何故かひしひしと伝わつてきて、今でも忘れられない思い出になつてゐる。

この部分は、「おしん」の故郷がどうしても山形でなければならぬ理由として、橋田が雪と最上川と方言を挙げる中で、左沢を訪れた思い出を語つたところである。本書は、昭和五十八年一月より五十九年十二月まで『毎日新聞』に

週一回連載された橋田の随筆をまとめて翌年に刊行された。この一文から「おしん」の放映当時、橋田がその滞在先を伯母が疎開していた「左沢から少し奥に入った村」と記憶していたことが確認できる。

橋田の伯母が疎開していたところが材木店であった。後述するように、その材木店が鉄道の駅近くにあったことは橋田の記憶にはつきりと残っていた。また奥羽本線から左沢線に乗り換えたことも、その地名の難題のせいで、言語学者を志していたという橋田の脳裏に強く焼き付いていたようだ。さらに後述するように、伯母小林かこの養子となった庄三郎の実家が大江町本郷にあった。そのため、「おしん」の脚本を書いたとき、左沢線終点の左沢と誤解してしまっただけではない。

ドラマの制作にあたり、NHKの制作スタッフは橋田の記憶をもとに左沢でその材木店を探したが見つからなかったらしい。そこで、ドラマ第一三回の冒頭シーンではこのようになった。

八十三歳になったおしんは、孫の圭を連れて左沢を訪ねるが、やはり材木店は見つからない。

圭「やつぱり、中川材木店なんて知らないってよ」

おしん「確かにこの辺だったと思っただけどねえ。

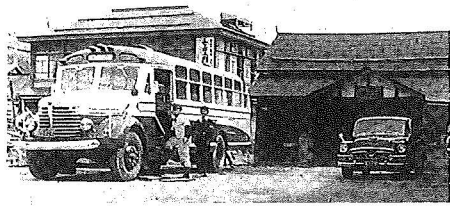
なんてったって七十六年も前のことだし、七

つだったんだもの。はつきり覚えてるつもりでも、子供の記憶なんて当てにはならないわねえ」

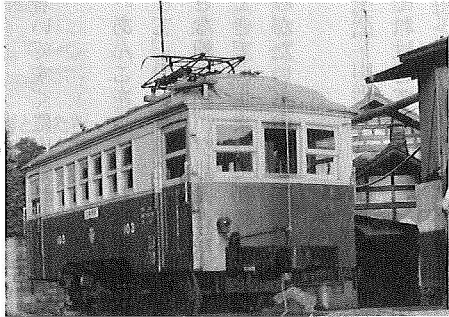
と、女優乙羽信子の扮するおしんが左沢の最上橋のたもとで立ち止まりながらつぶやいた。

橋田の山形での滞在先について、『朝日新聞』の記者各務滋が、一九九九年の時点で独自の取材を進め滞在先を突き止めている。ドラマの放映から十六年後のことである。新聞記事によれば、橋田は左沢の「鈴木材木店」と記憶していた。しかし記者が関係者への取材をもとに、西川町間沢であったことを伝えると、その後は一度も伯母の疎開先を訪れることになかった橋田自身の記憶の断片が線につながったという。新聞記事では、最初に大江町本郷に来て、それから西川町間沢に移ったとしている。実際には、後述するように東京からそのまま間沢にやって来た。

その材木店は、西川町の間沢にあった。当時は、西山村・川土居村・本道寺村・大井沢村の四村が合併して西川町が誕生する以前で、西山村と呼ばれていた。間沢には、三山電気鉄道（通称、三山電鉄）の終着駅があった（図版1 三山電鉄間沢駅前）。一九二六（昭和元）年に羽前高松駅から海味駅まで開通し、二八年九月には間沢駅まで延長し、全線一一・四キロメートルとなった。当時、山形県内でも

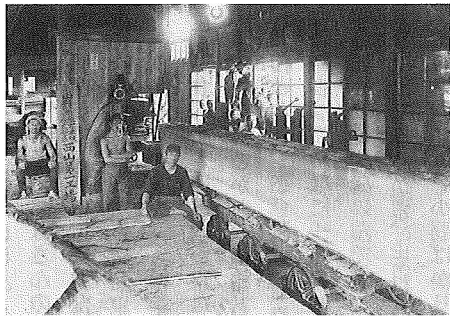


図版1 三山電鉄間沢駅前（『西川町史』）



図版2 廃線後、間沢駅構内に置かれた電車

最先端を行く電動鉄道の三山電鉄は、戦前、戦中、戦後と通勤・通学客や出羽三山の参詣客のほか、沿線に散在する鉱山の鉱石や木材の貨物輸送で賑わった。しかし利用者の減少により、ドラマが放映される以前の一九七四（昭和四十九）年十一月に廃線となり、間沢駅はなくなつた。このことも、間沢ではなく左沢と誤解される一因であつたと考えられる（図版2 廃線後、間沢駅構内に置かれた電車）。その間沢駅南側にあつたのが「佐藤材木店」で、戦時中の統制経済策のもとで村内の他の材木屋と合併して「西山第一工場」となり、多くの従業員を抱えていた。その材木



図版3 佐藤材木店工場内

進取の気性に富む喜代太は、大井沢で明治三十年頃から始まりその当時盛んに行われていた椀類や杓子類の木地ひきに加えて、スキー・家具やフローリング材の加工も手がけた。

ついでながら間沢の当時の様子について触れると、秋田営林局寒河江営林署直営の製板場や関連施設の貯木場・機関庫・貯炭庫などがあつた<sup>15)</sup>。また、間沢から寒河江川をさかのぼる月山沢水ヶ瀬<sup>つぎやまざわ</sup>までの軌道「寒河江林道」（一九二五年着工―二八年七月営業）も敷設されていたから、ブナ材の集材と加工のセンターとして次第に発展していった。

店を一代で築き上げたのが、明治二十五年大井沢中上生まれの佐藤喜代太（一八九二―六八）である（図版3 佐藤材木店工場内）。喜代太は、故郷の大井沢で製材業を始めたが、一九三二（昭和六）年に間沢駅の南側に敷地を手に入れ、翌年には一家で間沢に進出し

その後、丸友、山崎、工藤製材の材木店も加わり、駅周辺は木の香溢れる街となった。

さらに三山電鉄終点の間沢は、電車だけでなくバスも走り、乗り換えのターミナルとなった。一九二九年には、間沢から岩根沢や寒河江までのバス路線が営業し、三十七年七月には、湯殿山ホテルの開業に合わせて同ホテルまで運行するようになった。

### 三 たけゑが振る舞った「あんこのおはぎ」

さて、女子大生の橋田に生きる元気をあたえてくれたもう一つのものが、山形に着いてすぐに出された「あんこのおはぎ」であった。

そうしたら、叔母が、あんこをつけたおはぎを出してくれたのです。おいしくて、おいしくて、もう夢中ではお張ると、胡麻<sup>ごま</sup>とか、きな粉<sup>きなこ</sup>とか、クルミ<sup>くるみ</sup>とか、次々といろいろなおはぎが出てきて、生まれて初めて、食べ物というの<sup>もの</sup>はこんなにありがたいものかと、涙があふれて止まりませんでした。

「おはぎ」と書かれているが、山形の場合はおそらく「ぼた餅」のことであろう。それはさておきここで「おはぎ」を出してくれたのは、叔母と書かれているが、正確には、

疎開先の材木店の「おばさん」であった。橋田は当時の様子<sup>ようす</sup>を、地元の銀行が開いた講演会で、ユーモアを込めながらきわめて具体的に語っている。先の引用と重なる部分もあるが、関連する部分を全文引用して紹介したい。

私が山形が好きになったのもう一つ理由があるんです。そのおばさんが凄くいい人で、私なんか初めて会った人なんです。叔母達が物置を借りて疎開していた、その母屋の材木屋のおばさんなんですけど、親戚筋に当たるらしいんですけど。お腹をすかして行きましたから、小豆のおはぎが一杯出て来たんですよ。「いくらでも好きな丈食べなさい。」もうその時の感激つたらないですね。本当におばさんの頭から後光がさしているような気がして、夢中で食べたんですよ。七つ位食べたと思います。そうしたら、「そんなに食べちゃいけない。」と言うんですよ。びっくりして、私はおこられたのかと思つて、食べちゃいけないかつたんだなあと思つたら、違うんですよ。あとから六種類もおはぎが出てくるわけですよ。黄粉<sup>ごま</sup>とか、ごまとか、くるみとか。私達はすぐひがんで、疎開者はこんなに一杯食べちゃいけないのかなと思つたら、そうじゃないんですね。あとからおいしい物がまたまだ出てくるから、それも食べなさいと言われたんで、それを聞いて、小豆ばかり食べるんじゃないかと一生

後悔してまずけれども、その小豆のおいしさが忘れられないのですね。それで山形というところは好きなんです。そういう非常に豊かなイメージが私にあったわけです。<sup>10)</sup>

ここに出てくる「材木屋のおばさん」が、間沢の材木店主佐藤喜代太の妻、たけゑ(一九〇一—七四)である。<sup>11)</sup> たけゑは、大江町(旧本郷村)本郷小漆川で鈴木莊太郎の長女として生まれた。後述するように、本郷の鈴木家は橋田の「親戚筋」にあたる。一九一八(大正七)年十一月に佐藤



図版4 喜代太・たけゑ夫妻と孫たち

を開いていた(図版4 喜代太・たけゑ夫妻と孫たち)。

この部分から窺われるもう一つの重要な点は、橋田が東京からお腹をすかして最初にやってきたのは、間沢であったことである。この点は、講演の他の部分でも、「やつと山形にたどりついて、そこが材木屋さんだったんです。で

すから左沢というのは、何となく材木屋さんという印象があるんですね」(傍点引用者)と明言している。後半部分の左沢云々が間沢の記憶違いであることは、朝日新聞の記者がすでに指摘したとおりである。

橋田が左沢ではなく最初に間沢にやって来たのは、特別な理由があった。伯母の小林かのが疎開していたからである。かのの夫、登馬は東京の戸越(現、品川区)で酒屋を開いた。商号「花三」という醤油醸造も営み、ソースの生産を手がけていた。<sup>12)</sup> 一家は東京大空襲で焼け出されて、おそらく四月ごろから親戚を頼って疎開し左沢に来た。その小林夫妻の養子となったのが、本郷小漆川の鈴木莊太郎の三男庄三郎である。山形から上京して小林家の店で働いていた庄三郎は、その働きぶりを見込まれて一九四一(昭和十六)年二月に小林登馬と養子縁組をした。<sup>13)</sup>

現在、大江町本郷に在住する鈴木隆一は、庄三郎の甥にあたる。一九三二(昭和七)年生まれで当時十三歳であった隆一は、東京から疎開してきた小林一家について、始めは左沢の鈴木家に来て自宅の蔵の前にある小屋に住んだこと、それから間もなく間沢に移ったことを説明してくれた。

間沢に移ったのは、庄三郎の長姉のたけゑが嫁いでいたからである。また次兄の莊次郎もその材木屋で働いていた。たぶん、間沢に行くことを勧めたのは、鈴木家当主で父莊

太郎であったと思われる。荘太郎自身も、喜代太とたけゑ夫婦が住む間沢にちよくちよく訪れていたからである。左沢駅から汽車に乗り、羽前高松で三山電鉄に乗り換え間沢に行つては、四、五日逗留することが多かつたという。間沢では、長女たけゑが二男六女を育てていた。荘太郎はこれらのたくさんの孫たちを見に行くと称してはいたが、実は裕福な材木店での娘のもてなしがよほど気に入つていたようだ。

間沢に疎開していた橋田の伯母小林かのの一家は、佐藤材木店の納屋に間借りしていた。東京から疎開してきたかのの家族は、四国生まれのかのに庄三郎の妻君江と三歳と一歳の子供たちであつた。当時、間沢がある旧西山村では、東京など大都市で戦災にあつて疎開してきた人たちを数多く受け入れていた。『西川町史』には、昭和二十年十一月一日の調査時の西山村での疎開受入戸数二三三戸、疎開人口一一六〇人という貴重な数字を挙げてゐる。村の全戸数は一一一八戸、全人口七〇二七人であつたから、五軒に一軒は疎開者の家族を受け入れていた計算になる。西山村が受け入れた多くの疎開者の中に、橋田の伯母の家族も含まれていたのである。東京が次第に落ち着きを見せはじめたその年の晩秋、橋田は東京に戻つて学生生活を再開した。

橋田の西川町間沢滞在から、すでに六十年以上が過ぎて、



図版5 佐藤材木店の母屋玄関前

当時のことを記憶している人もほとんどいなくなつた。佐藤材木店も、三山電鉄の盛衰と歩調を合わせるかのように、安価な外材輸入による木材価格の下落などで経営が傾き始めた。一九九五(平成七)年二月末の失火で工場と母屋をほぼ全焼したため会社をたたんだ(図版5 佐藤材木店の母屋玄関前)。

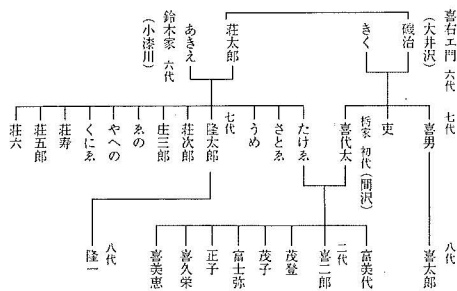
明治生まれの喜代太とたけゑは、一九六八(昭和四十二年八月と七四年十一月にそれぞれ亡くなつた。大正に入つて生まれた長女の富美代は一九九七(平成九)年四月、次女の茂登はその翌年十一月と病で相繼いで亡くなつた。喜代太の材木店を受け継いだ二代目の長男喜二郎は、九九年九月不慮の事故のために工場内で命を落した。中国に出征し敗戦後はしばらくシベリアに抑留されていたので、橋田が滞在した当時は間沢にいなかった。そのため、「おしん」ブームが巻き起こつてからも、喜二郎は橋田が滞在した材



木店であると自ら名乗り出ようとはしなかったようだ。次男の富士弥は、出征した兄に代わって材木店を切り盛りし、戦後もその経営を支えた。当時の様子をもっとも知っていたはずであるが、二〇〇七年十二月に亡くなってしまった。ただドラマの放映当時、本家の材木店に事前に取材がなかったことを不思議がっていたという。

喜代太の四女で間沢に在住する正子は、一九三二年生まれで終戦当時は十三歳であった。東京からきた洋服姿の女子大生「スガちゃん」と一緒に遊んだ記憶は残っていない。

### 佐藤喜代太・たけゑの親族図

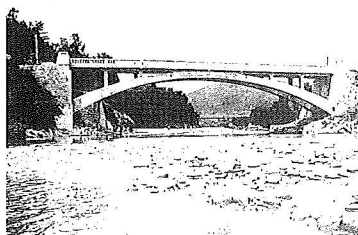


ただ母屋の二階に一室を用意された橋田が、平屋の屋根に寝ころんで空を見上げたり、本を読んだりしていたのを覚えている。

同じく喜代太の六女、一九三七年生まれで現在は千葉県鎌ヶ谷市に住む喜美恵によれば、橋田は単身で山形に来たのではなかった。橋田の伯母かの夫、登馬が、橋田と「エツちゃん」と呼ばれた姪を連れて夕方



図版 6 現在の長沼公園と大沼神社



図版 7 旧高瀬橋 (『西川町史』)

にやって来たという。当時小学二年生の喜美恵は、母たけゑに弁当を作ってもらい、橋田と一緒に長沼公園に行ったことも記憶している。

長沼公園は隣村の川土居村沼山にあった。間沢駅から歩いて三〇分ほどのところにあり、長沼と大沼神社のほかに運動場も備えていた。三山電鉄は、長沼公園を間沢の名物菊人形と近くの沼山発電所見学を組み合わせて観光地として宣伝したので、山形市内や左沢沿線を中心とした村山地方の学童にとって格好の遠足コースとして盛んに利用されていた。その賑わいは、戦後もしばらくのあいだは続いていた (図版 6 現在の長沼公園と大沼神社)。

佐藤材木店から長沼公園へ行くには、最上川の支流、寒

河江川に架かる高瀬橋を渡らなければならない。橋田の小さな記憶に残っていた橋のたもととは、最上川河畔の最上橋ではなく、おそらく寒河江川に架かる高瀬橋であったにちがいない。高瀬橋は、一八七五（明治八）年に旧山村間沢と旧川土居村沼山をつなぐ橋として架けられた。一九三六（昭和十一）年にコンクリート製の永久橋に架け替えられた（図版7 旧高瀬橋）。

#### 四 大井沢との縁

ドラマ「おしん」は、もちろん脚本家橋田の創作の世界である。しかしドラマの中には、橋田自身の間沢の材木店で滞在中のさまざまな体験が投影されていると推測される場面が無いわけではない。ドラマでは、最初の奉公先が同じく材木店という設定になっている。そこで六歳で子守奉公を始めたおしんの生活はとて辛いものとして描かれている。とはいえ木材店があるところは、雪深い山村で生まれ育ったおしんが最初に訪れた都会<sup>マヂ</sup>で、子守しながら目を耀かせて読み書きを学ぶことができた尋常小学校があった。

女優長岡輝子が扮する酒田の加賀屋の祖母おくには、喜代太の妻たけ糸を彷彿させるところがある。「あんこのお

はぎ」を作って気前よくご馳走したのは、たけ糸であった。明治三十四年生まれで、全くの偶然であろうが、ドラマのおしんと同じ年に生まれた。喜代太より九歳年下であったが、戦前から材木店の勘定一切を切り盛りしていた。佐藤材木店は、戦後になると上間沢地区に広い田んぼを所有するようになるものの、戦時中はまだそれほど所有していなかったらしい。橋田に振る舞われたぼた餅のモチ米は、おそらく近くの商店から購入したものであろうと、前出のたけ糸の娘正子は指摘する。戦後になって喜代太が家の材木店経営のみならず、米作りも手がけようになつたのは、多くの従業員を抱える中で戦時中食糧不足に悩まされた苦い経験があったからである。

冒頭に述べたように、西川町大井沢では雪を背景にして「おしん」の少女時代のロケが行われた。具体的に挙げると、①吊り橋でのおしんと圭、②イワナ釣り、③祖母の葬列、④母ふじ入水、⑤おしめ洗い、⑥俊作死後の村の道、⑦炭焼き小屋跡、⑧山の中の生活、⑨俊作とハーモニカ、⑩洗濯場及び雪くみ場、⑪獵場とソダ切り場、⑫俊作の最後、⑬おしんとタヌキの二三か所である。いずれも、少女時代のおしんを描く印象的シーンとして登場する。これらのロケ地の選定は、番組制作スタッフによるもので、確かに大井沢はドラマの設定での山形の雪深い山村に相応しい。

しかしそれだけではなく、橋田が伯母の疎開先と理解していた左沢と実際の滞在先の間沢のいずれの場所から見ても、大井沢は選ばれるべくして選ばれる理由があった。

先にも述べたが、間沢の材木店主佐藤喜代太の生まれ故郷は大井沢であった。家号喜右工門六代の磯治ときくの三男として生まれた。長兄が七代目の喜男、次兄が吏である。次兄佐藤吏（一八八七―七九）は、一九〇九（明治四十二）年山形師範学校を卒業し、西村山郡の三泉・高松・寒河江の尋常小学校校長や県立高島実科女学校校長などを歴任した。一九四三年、退職ののち弟の喜代太を頼つて一時期に間沢に居を構えたことがある。四七年には、公選による最初の大井沢村長に当選している。一九五四年に大井沢村が西川町に合併されるまで村長を勤めた。「白峯」と号して書と俳句・短歌に巧みで、のちに句集『瀬音』『白喜山』をはじめ多くの句集を残した文化人でもあった。吏の間沢に居を構えていた時期と橋田の滞在時期は重なっており、弟が営む材木店で、白峯と文学少女の橋田の二人が顔を合わせたこともあったかもしれない。

実はたけ糸の父鈴木荘太郎も、同じく大井沢の喜右工門家の出であった。佐藤磯治の弟であり、喜代太の叔父にあたる。一八八〇（明治十三）年一月、本郷小漆川の鈴木三五郎の婿養子となつた。

三山電鉄が敷設され、終点の間沢から路線バスが走るようになる以前は、大井沢から県都の山形に出るには、大井沢峠を東に越えて左沢に一泊し、最上川に架かる中郷橋を渡つて中山町長崎に出るのが順路であつた。左沢線の前身、村山軽便鉄道が開通して、一九二一（大正十）年に左沢駅ができると、山形まで汽車で行けるようになった。それでも左沢に出るまでが容易ではなく、早朝に大井沢を出て難所の大井沢峠を越えて六里余り（約二四キロメートル）を歩いて左沢に着く頃には、男の健脚でも夕暮れになつた。そのため、左沢駅に近く庭先の一本松が目印の小漆川の鈴木家は、勢い大井沢から来る人たちの定宿になつた。

これらのお客の接待を一手に引き受けたのが、荘太郎の妻あきえ（一八八〇―一九三二）であつた。昭和に入つて、前述したように三山電鉄が間沢まで通じるようになると、鈴木家に立ち寄る人は次第に稀になり、代わつて間沢のたけ糸のところに、大井沢からの泊まり客が絶えなくなる。今度は、たけ糸が母あきえに代わつて泊まり客たちのもてなしを引き継ぐようになったのである。このように、橋田が滞在した間沢の材木店は、実は左沢のみならず大井沢とも深い絆があつたのである。

大井沢口ケで撮影された映像でもう一つ印象深いのは、男優中村雅俊が演じる俊作兄さんとの触れあいである。そ

これらの多くは厳寒の雪山を背景に撮影されている。俊作は日露戦争の脱走兵で、彼を月山が見える山奥の掘つ立て小屋に匿って暮らしているのが炭焼きの松造爺という設定になっている。松造はその戦争で二人の息子を亡くしていた。かつては炭焼きとマタギの里として知られ、平家の落人伝説も残る大井沢は、これらのシーンのロケ地にピッタリで、ドラマ制作スタッフの苦心のほどが窺われる。

今回、橋田を受け入れた材木店を調べる中で、喜代太が二十五歳のときシベリア出兵に駆り出されていたことを知った。たけゑと結婚した翌年、大井沢に木地ひきの作業場を建てた頃のことであった。

一九一八（大正七）年、日本はアメリカの提案に応じロシア革命の混乱に乗じてシベリアと北満洲に出兵した。日本の将兵七万二四〇〇名が極寒の地に派遣されたものの、なんら成果を挙げることなく撤兵を余儀なくされた。このため「無名の師」と非難され、日清戦争や日露戦争とは異なつて語られることが極めて少ない。その出兵に喜代太も翌年派遣されていたのであった。幸い、一年後には無事郷里に戻つて木地ひきの経営を再開することができた。

大井沢のような山奥の村からも、はるばるシベリアまで駆り出されていた青年がいたことに驚くとともに、ドラマの中で俊作がおしんに与謝野晶子の詩「君死にたまふこと

なかれ」を読み聞かせる場面を思い出した。それをたしなめる松造爺に対して、俊作は「おしんだって、いつかは戦争に巻き込まれるときがくる……」。今の日本は、このままではおさまらない。外地に活路を求めて戦争が起きる。そのとき戦争とはどんなものかおしんにも知つておいてもらいたいんだ」と、語気を強めて語り始める。

そして「おしん、しつかりと覚えておくんだぞ、どんなことがあつても、戦争はしちやならない。もし、日本が戦争をするようなことがあつても、おしんは反対するんだ。ひとりの力はちっちゃいものでも、そういうひとたちが力を合わせたら、国を動かすことだってできる。ひとりひとりの考えかたが大事なんだぞ」と俊作がおしんに教え諭す、最も印象に残るシーンである。

ドラマの設定は、日露戦争後の日本。その後、外地への最初の出兵となるのがシベリア出兵である。さらに満州事変をへて、橋田も巻き込まれる日中戦争、太平洋戦争と続いていく。のちに、おしんは月山を見つめながら、「俊作にはさんには、いろんなことを教えてもらった……。ものはなくても、ひとはしあわせになれるつてことも……。人間が生きるつてことはどういふことなのか……、そんな大事なこともね」と、孫の圭に述懐する。「おしん」では、国家の意志で巻き込まれ傷つく庶民の

視点から戦争が描かれている。国家の立場から見た戦争観とは対極にある視点である。ドラマが放映された一九八三年当時は、戦争を実際に体験した世代が大半を占めていた。視聴者の多くが「おしん」を支持した理由もそこにあつた。

そして、橋田自身、『おしんの遺言』の序文で「おしん」の執筆意図を自らこう語っている。

戦争は過ぎたことだからというのではなく、国民ひとりひとりにも責任があるのだということだけは、どうしても書かねばならないと思つたのです。それは、あの戦争で私が、身体が震えるくらいに感じたことでした。だから、おしんにも戦争責任があるという設定にしました。<sup>48</sup>

自らも軍国少女として育つたという橋田は、終戦直後、月の麓にある西川町に滞在するなかで新しい未来を生きしていく希望を手に入れた。その生きる希望は、戦争の責任を自らも受けとめる姿勢と引き替えに手に入れたものであつたのである。

## おわりに

ドラマ「おしん」の構想が生まれたきっかけは、明治生

まれの一人の女性から届いた一通の手紙であつたと、橋田自身明かしている。若いころに米一俵で何度も奉公に出され、その後は女郎に売られたが、そこから逃げ出し、ミシオンを習つて自立したという貧しかった時代の体験が綴られていた。現在でも、おしんのモデル探しは、日本全国各地で地域おこしを目指して続いている。最近では、『静岡新聞』が二〇一三年三月七日付けで、「おしんのモデルは川根本町の女性だった」という記事を配信している。これによれば、橋田が雑誌『主婦と生活』誌上に連載していた「母たちの遺産」<sup>49</sup>に、静岡県川根本町出身の一人の女性が波乱満ちた半生を綴つた手紙を次女に代筆させて送つたという。その女性は、奉公に出るために、最上川ではなく大井川を筏で下つた。ただ橋田自身が書いているように、おしんのモデルは、一人ではない。<sup>50</sup> しいて言えば、明治の女性たちということになるであろう。

ドラマの中でおしんの故郷が山形でなければならなかつた理由として、橋田は雪と最上川と方言を挙げていた。本稿で明らかにしたように筆者が注目していたのが、橋田が終戦直後の一時期山形に滞在していた事実である。その滞在期間は、わずか一月ほどに過ぎない。しかし橋田自身が述べているように、その年の秋に山形で見た、見渡す限りに稲の穂が黄金色の波のように続き、神々しいばかりに光る

景色は、敗戦後の日本で新たに生きていく希望を教えてくれた。しかも、それまでソウル、大阪、東京とずっと都会で育った橋田がおそらく初めて経験した田舎暮らしであったから、西川町間沢の材木店で見聞きしたさまざまな出来事は、未来への再生を誓いつつあった文学少女橋田の脳裏に強く刻印されたに違いない。それらの体験は、それから三十数年後に「おしん」を産み出すにあたり、時代を鮮やかに切り取る稔り豊かな表象となつてドラマに投影されたのである。それ故、西川町は「おしん」を産んだ橋田の心の故郷であつたと言えよう。

へ註▼

(1) 「おしんと観光」『続おしん・全資料』放送世論調査所、一九八四年一月所収。

(2) 「おしん」の海外放映の年次を列挙すると、以下のとおりである。

- 一九八四年、アメリカ、オーストラリア、シンガポール、タイ。
- 一九八五年、中国、ポーランド、香港、マカオ、ブラジル、ベルギー、カナダ。
- 一九八六年、マレーシア、インドネシア、イラン。
- 一九八七年、スリランカ、サウジアラビア。

一九八八年、ブルネイ、メキシコ、カタール。

一九八九年、バレーン。

一九九〇年、シリア、フィリピン、ドミニカ、バングラデシュ、ペルー。

一九九一年、パキスタン、ボリビア、パナマ。

一九九二年、ネパール、グアテマラ、ニカラグア、エジプト、インド。

一九九三年、ルーマニア、チリ、ウルグアイ、ジャマイカ、ガーナ、ホンジュラス、キューバ。

一九九四年、ベトナム、台湾。

一九九五年、ミャンマー、コスタリカ、パラグアイ、カンボジア、

一九九六年、ラオス、モンゴル、スーダン、トルコ、ブルガリア。

一九九七年、マケドニア。

一九九八年、エチオピア、ベネズエラ。

年次不詳は、イラク、ブータン、ガボンなど。

「海外でのOSSEZ」(NHKインターナショナル)『続おしん・全資料』(放送世論調査所、一九八四年三月)所収、及び『おしん』を見た国と地域『朝日新聞』山形版、一九九九年一月二十八日付の記事等を参照して作成。アジア・中近東・南米諸国で人気が高いの対して、西欧諸国ではそれほどの

人気を得ていない。例外として、隣国の韓国と北朝鮮では、政府の文化政策のために未だに放送されていない。

- (3) 中国で「おしん」がよく視聴されていたことを示す筆者の個人的な体験を紹介したい。一九九四年、中国の北京で在外研究を行った。指導教授で明清史研究の大家として知られる顧誠先生のご自宅に訪問した時のことである。会話は型どおり、「勤務先は山形大学で、山形県にある」と自己紹介から始まった。日本を一度も訪れることのなかった先生は、てっきり山形県のことをご存知ないと考えて、若き日の魯迅が学んだ仙台の隣県であると説明をつけ加えた。先生は意外にも、「山形県は知っている、『阿信』の生まれ故郷だろう」と応え、放送をよく見たと教えてくれた。中国でも「おしん」がこれほど有名なのに驚くとともに、いわゆる革命世代で厳格な学風でも知られる先生が愛好されていたことに感激したことが今でも思い出される。

- (4) 橋田壽賀子『NHKテレビ・シナリオ おしん(一)奉公篇』日本放送出版協会、一九八三年、四二頁。
- (5) 橋田壽賀子『おんなは一生懸命』中央公論社、一九八六年、同『おしんの遺言』小学館、二〇一〇年。
- (6) 『おしんの遺言』二四頁。
- (7) 『おしんの遺言』二五頁。
- (8) 橋田壽賀子『ごころ模様』毎日新聞社、一九八五年、六四頁。

- (9) ここでは伯母とあるが、『おしんの遺言』二五頁では、「叔母」と記している。講演録『おしんと的一年』山形相互銀行経営相談室、一九八四年では、「母の姉です」(三一頁)と橋田は述べていることから、正確に言えば伯母である。

- (10) 『おしんと的一年』に、「実は私は左沢の奥に終戦後に行つたことがあるんです。ヒダリザワと書いてアテラザワと読むんで、変なところだと思つたんですけど、そこに東京の叔母が疎開してたんですね。母の姉ですけども、(下略)」(三一頁)とある。

- (11) 橋田『NHKテレビ・シナリオ おしん(一)奉公篇』、一〇九頁。

- (12) 『再生三〇世紀 山形この百年 おしん』朝日新聞『山形版』一九九九年二月一八日付。

- (13) 日中戦争が長期化し統制経済が強化される中で、昭和十八年に三山電鉄は、高島鉄道・尾花沢鉄道などとともに山形交通株式会社に統合された。『西川町史』下巻、近代・現代・民俗編、第八章第三節、一九九五年。

- (14) 『西川町史』下巻、四九〇頁。

- (15) 『西川町史』下巻、五三六頁。

- (16) 田中哲『山形交通四十年史』山形交通株式会社、一九八五年、一二七頁。

- (17) 『おしんの遺言』二五頁。

(18) 木村正太郎等編『聞き書山形の食事』日本の食生活全集6、  
農山村漁村文化協会、一九八八年。

(19) 『おしんと的一年』三三〜四頁。

(20) たけゑは、橋田の自伝的小説『春よ、来い』の中では、山形の「山田材木店」の女主人「サダ」として登場する。主人公の「春希」は、友人二人とともに伯母「アイ」が疎開する山形に行き、着いたその日の夕方にサダからあんこや豆、胡桃、胡麻、きな粉のぼた餅を次々と振る舞われている。サダが伯母の婿養子「伸三」の一番上の姉とされているのは、たけゑが庄三郎の長姉であるのに対応している。橋田壽賀子『春よ、来い』二、戦後篇、日本放送出版協会、一九九五、二六〜三一頁参照。同書戦後篇「再出発」の中の山形での場面は、橋田の個人的体験をかなり忠実に再現したものと判断されるが、この点については別の機会に考察を加えることにしたい。

(21) 『おしんと的一年』三二頁。

(22) 終戦から数年後、伯母夫妻はアミノ酸醤油で大儲けをしており、その援助もあって日本女子大学卒業後に早稲田大学に通うことになった。『おしんの遺言』五八頁。

(23) 本家の鈴木家は、本郷村(現、大江町)で初代戸長を勤めたほどの素封家であった。義父三五郎の代に土地開墾事業を計画したものの失敗して、先祖伝来の田地と山林まで手

放した。分家に出されていた荘太郎(一八八〇—一九五九)は、義兄に代わって傾いた本家を嗣いで、のちに鈴木家を再興した。一九二五(大正十四)年に上小湊川肥料組合を設立し、以来一九四〇(昭和十五)年まで組合長となった。

同年八月、小湊川養蚕実行組合長として、山形県より蚕業共励委員を囑託されている。戦後は、近所の道路改修に尽力したり、名刹巨海院の檀家総代を長年務めたりもしている。佐藤鉄雄『愛と忍苦の生涯——鈴木荘太郎翁伝』一九五八年。本書は荘太郎の喜寿を祝って一書にまとめられた。

(24) 『愛と忍苦の生涯——鈴木荘太郎翁伝』。

(25) 『西川町史』下巻、八六一頁。なお、西川町役場には、合併前の旧西山村の村役場文書(西山村役場文書)が保管されており、当時の疎開者を記録した「寄留受付帳」等の書類が残されている。調査を依頼した西川町総務課からの回答によれば、残念ながら小林かのの家族の記録は残っていないとのことであった。町史編纂にも用いられた西山村役場文書の存在については、生涯学習課町史編纂室の文化財・郷土史調査員の那須恒吉氏よりご教示を得た。記して謝意を表したい。

(26) 『西川町史』下巻、四九二頁。

(27) 『西川町史』下巻、三六八頁。

(28) 西川町月山朝日地区観光協会「おしん大井沢口ケ地めぐり」



『続おしん・全資料』放送世論調査所、一九八四年三月所収。

- (29) 井上助太郎等編『米寿白峯』同刊行協賛会、一九七四年、二〇六頁。ちなみに、吏と同じく大井沢から山形師範学校に入学した同郷の先輩が志田莊次郎である。一九二八（昭和三）年から三六年まで、大井沢村長を務めた。莊次郎の娘周子は、東京女子医学専門学校を卒業し、故郷の大井沢に戻り地域医療に一生を献げたことで知られる。莊次郎の死後、周子が父のように頼み慕っていたのが、白峯（吏）であった。周子が白峯翁の古稀を祝して詠んだ歌に「うれいごとも語りて父とたのみゐる白峯翁のよはひながかれ」がある。『瀬音』佐藤白峯先生古稀祝賀会、一九五六年所収。

鈴木久夫『周子の生涯』同刊行協賛会、一九七五年には、白峯が「女医としての志田周子」と題する秀逸な序文を寄せている。

- (30) 『米寿白峯』二七頁。

(31) 佐藤『愛と忍苦の生涯——鈴木莊太郎翁伝』「妻の思い出」。

- (32) 佐藤喜代太『俳句短歌集 寒河江川のほとり』東光膳写堂、一九六六年の「あとがき」の中の略年譜に見える。その句歌集には、喜代太が寒河江川を詠んだ「冬はただ川一すじに雪の原 秋は黄金の波よするなり」という一首を載せている。終戦直後に橋田が山形で見元気づけられた「黄金の稲穂の波」は、寒河江川のほとりの見慣れた秋の風景で

あった。

- (33) 『山形県史』資料篇二〇、近現代史料2、一九八一年、四八頁には、大正七年九月ウラジオストック出兵にあたり、山形県知事依田銈次郎が出した訓令を載せている（山形県訓令第四十五号）。

- (34) 橋田『NHKテレビ・シナリオ おしん（一）奉公篇』、一三七、八頁。

- (35) 『NHKテレビ・シナリオ おしん（二）奉公篇』、一三九頁。

- (36) 『NHKテレビ・シナリオ おしん（一）奉公篇』一三五頁。

- (37) 山本陽史「やまがた文学・芸術紀行 ドラマ『おしん』（一）『読売新聞』二〇一一年一月一日 [http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/yamagata/feature/yamagata1271428347440\\_02/](http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/yamagata/feature/yamagata1271428347440_02/) news/20120115-0Y18T00731.htm

- (38) 橋田『おしんの遺言』一三頁。

- (39) 『おしんの遺言』八、九頁。

- (40) <http://www.at-s.com/news/detail/474572763.html>

- (41) 連載は、一九八一年に主婦と生活社より同名で単行本として出版された。

- (42) 橋田『ごころ模様』『おしん』と明治の女性』五三頁。